

みんなで協力して治せる環境を整備し 職場の結束と思いやりが生まれる土壤に

株式会社シニアライフアシスト

香川県高松市に本社のある株式会社シニアライフアシストは、市内で介護付有料老人ホームとデイサービスセンターなどの施設を運営している。創業者の「自分が入りたい施設が香川県にない」という思いから始まったという同社では、利用者一人ひとりのライフスタイルに寄り添い、「自分らしい暮らし」を重視したサポートを提供している。

なかでも人気なのは「デートプラン」と呼ばれるもので、これは利用者の夢を叶える1日をプレゼントするというサービスだ。これまでに「琵琶湖が見たい」や「小豆島の母校を訪ねたい」などの願いをスタッフと家族が連携して叶えてきた。

そんな同社では働き方改革と社員の健康増進のため、2012年から産業医を定めて、2018年より健康診断受診促進などの取組を開始、従業員のうち75%が女性ということもあって女性の活躍促進にも力を入れ、2022年には健康経営優良法人の認定も受けている。

そこで今回は、衛生管理者として同社における産業保健活動を主導している管理部の小西里美部長に、健康経営に対するさまざまな施策や両立支援の実際についてお話を伺った。

1. 治療と仕事の両立支援セミナーで 支援の進め方と患者側のニーズを知る

同社が両立支援に本格的に取り組むことになったきっかけは、2019年に2人の女性スタッフに乳がんが見つかったことだ。

「そのときは何の相談に乗ったらよいのか？ すら分からず、会社の制度も整っていませんでした。お年寄りのことをすごく考えて働いている会社なのに、スタッフの健康に

はちゃんとしていなかったと気づきました」と。

そこで小西さんはまず、同年11月に香川労働局主催の「治療と仕事の両立支援セミナー」に参加する。そこでワークライフバランスの実現に向けた職場環境づくりを学び、実際にがんに罹患した患者の立場からの「会社にしてほしかったこと」「上司から言葉をかけてもらって嬉しかった言葉」などの具体例に触れ、両立支援の進め方と患者側のニーズを知ることとなる。

「両立支援コーディネーター基礎研修の存在もそこで知りました。なかなか基礎研修の予約が取れなかったのですが、2020年11月にやっと私自身が受講することができ、社会資源の使い方や、実際に取り組んでいる会社の事例など多くのことを学ぶことができました」。

こうした経験から治療休暇制度*をまず取り入れようと考え、2021年4月から就業規則に明記して運用を始め、現在も2名が利用している。

さらに、健康診断の受診率を向上させるため「健診休暇制度」も新設した。

「これまでも勤務時間内に会社負担で健診に行ってもらっていたのですが、なかなか受診率が上がりませんでした。そのひとつの要因が、健診前後は仕事に行かなければならなかったことです。そこで40歳以上は丸1日有給休暇にするので健診を受けましょう、という制度にしました」と。あわせてがん検診も会社負担で休暇制度の対象とするようにしたところ受診率は上がり、健診は100%、がん検診は40歳以上の人の50%前後が受診するようになったという。

「逆に言えば残りの50%は受けていないということですので、まだまだというところです」と、小西さんはさらな



早ね!早おき!朝ごはん!にチャレンジした子供と。中央がスタッフの瀧井さんの受診率アップに意欲を見せる。

2. こまめなコミュニケーションで 制度の浸透と実効性の向上をはかる

同社がこうした施策を進められる背景には、経営層による「スタッフのためになることだったなら、どんどん実施して」という全面的なバックアップもある。最初、就業規則に治療休暇制度を盛り込んだ際も社長から即座にOKが出たという。

こうして同社では、両立支援だけでなく、柔軟な運用で選択肢の多い短時間勤務制度など社員の健康のためにさまざまな施策を展開してきた。なかでもユニークなのは「早寝早起朝ごはんチェックシート」だ。これは香川県が夏休みの子供対象により生活習慣を身に付けてもらいたいと始めた制度だが、同社はこれを会社の取組として、提出できたら1,000円の図書カードを贈呈している。

「親である社員と一緒に早寝早起朝ごはんに取り組んでもらいます。子供さんは学校のカードより真面目にやってくれたりして、親子で健康習慣を身に付けるいい機会になっています」。

こうした制度の周知と浸透のために小西さんが重視しているのは、こまめなコミュニケーションだ。「毎年4月に新入社員への就業規則説明会を実施していますが、心当たりがない人はちゃんと聞いていません。いざ当事者になった時には全部忘れているので、そこはこちらがアンテナを張って、『病気になった人がいる』という声が私達の耳に入ったら、こちらから『こういう制度があります』と該当者に個別に案内するようにしています」。

両立支援者には、特に気を付けて「今日大丈夫なの?」

などと声をかけ、体調を崩して休んだあとには何気なく「どう?」とだけ投げかけるなど、臨機応変にやり取りすることで、相手も検査の前や結果が分かったときには必ず声をかけてくれ、支援がやりやすくなっているという。

3. 知られずに治療と仕事の両立をしたい その思いにどう応えるか

一方で小西さんが今でも難しいと感じるのは「現場にどれだけ情報提供できるか」のバランスだという。

「まだ支援策が十分整っていない時期にスタッフの一人が亡くなってしまいました。本人の希望が『周りにがんだと知られたくない』ということだったので、それを現場に知らせずにサポートすることがとても困難でした」と小西さんは振り返る。

病欠が増え、痩せていることを聞かれても、「ちょっと体調崩してて」ぐらいしか言えず、自身の体調について職場には知らせないで欲しい、とも言われていたため現場に詳しい情報提供ができなかった。そのため現場でのサポートが難しく、もっとよい両立支援ができたのではないかと悔いが残っているという。

一方で、「病気だと周知してよい」と言ってくれているので支援しやすいのだが、今後「知られずに治療しながら仕事を続けたい」という人が出たときにどう対応すればいいのか模索中だ。

「でも、病気になることは本人にとってはすごく嫌で後ろ向きになることですが、会社として『みんなで協力して治そうよ』と前向きになれる環境を整備することはできると思います。そうして病気と向き合っている人がいることで職場の結束が強まり、スタッフ同士の思いやりが生まれるような土壌をつくることに貢献していきたいと思います」と、小西さん自身が前を向いて進んでいく決意だ。

***治療休暇制度：**がんなどの反復・継続して治療が必要となる傷病に対して、通院に対する有給休暇を年10日支給する。パートは日数比例付与、勤続年数3年以上で雇用保険加入者であることが条件

会社概要

株式会社シニアライフアシスト

事業内容：介護サービス業、介護付有料老人ホーム運営、デイサービス

設立：2003年

従業員：100名(2023年9月1日現在)

所在地：香川県高松市